

全学共通入学前教育教材「アカデミック・リテラシー入門『発表する』」を活用した学部におけるプレゼンテーション教育の可能性

白鳥 亜矢子, ショーン・ホガード

1. はじめに

近年のグローバル化の中、企業においても人材の高いプレゼンテーション能力が求められている。初代iPhone発表時のスティーブ・ジョブズ氏のプレゼンテーションは記憶に新しいが、その後もTED talksなどのプレゼンテーション関連ウェブサイトの利用は世界的な広がりを見せ、プレゼンテーションの重要性は国内でも益々認識されている。民間の企業界のみならず、大学などのアカデミック教育界においても、プレゼンテーション能力育成に向けた教育展開は重要視されつつあるものの、学部教育の中で十分な教育や実践の機会が確保されない場合も少なくない。本学においても、1年目の教養基礎教育でプレゼンテーションの基礎を学び、本格的な実践が4年生の卒業論文発表時という学生も多い。学生は「良いプレゼンテーションとは何か」に関する基礎知識、注意すべき点、テクニック等がわからず困惑し、一方で教員も、講義内やゼミ内で発表させる機会を設けたくても、学生がどの程度ノウハウを持ち合わせているか不明なため、それぞれの教員がそれぞれの方法や内容で一からプレゼンテーション教育を実施せねばならないという状況にあり、それがクラス内におけるプレゼンテーション課題実施のハードルを上げる一つの要因とも考えられる。このような非効率な現状を改善する一つの方法として、2022年より本学ホームページ上で公開されている全学共通入学前教育教材「アカデミック・リテラシー入門『発表する』」を活用し、教養基礎科目や専門教育科目など様々な学部教育において一貫したプレゼンテーション教育が実施されることで、学生のみならず教員にとっても効率的で効果的な教育の展開が可能なのではないかと考える。本稿では、アカデミック・リテラシー入門の概要や、その構成カテゴリーの一つである「発表する」の具体的な教材内容とその活用方法を示しながら、今後の本学のプレゼンテーション教育における新たな可能性について検討する。

2. アカデミック・リテラシー入門について

2-1. アカデミック・リテラシー入門とは

アカデミック・リテラシー入門とは、2021年に本学全学教育推進センター教員27人が分担して作成した全学共通入学前教育教材である。本学入学を控えた高校生全員が、大学合格から入学までの時間を利用して、「大学の学びとはどのようなものか」に関する基礎的知識をアカデミック・リテラシーという観点から学び、入学後の初年次教育、教養・基礎教育に備えることを主な目的としている。アカデミック・リテラシー入門は、「大学での学び方」、「調べる」、「読む」、「覚える」、「考える」、「書く」、「発表する」、「ポートフォリオのすすめ」、「相談する」という9つのカテゴリーで構成されており、それぞれが1から最大で6つのサブテーマを有する形式となっている。印刷した紙媒体の教材ではなく、パワーポイントで作成したスライドをPDF化したデジタル教材であり、本

学の新生ポータルサイトに全ての教材が掲載されている。

以下が、アカデミック・リテラシー入門を構成する9つのカテゴリーとそれぞれのサブテーマである。本稿で、学部教育における活用方法を提案する「発表する」は、7つめのカテゴリーとなっており、そのサブテーマは「プレゼンテーションの基礎」と「伝える力を高めるテクニック」の2つとなっている。

- I：大学での学び方（なんのために学ぶのか、講義を楽しむ方法、役に立つノートテイク、予習、復習はなぜ大事なのか）
- II：調べる（図書館で文献を探す、インターネットで情報検索、情報の種類と特性）
- III：読む（情報の整理とまとめ方、読解力をあげる方法）
- IV：覚える（いろいろな効率的記憶法）
- V：考える（論理的に考える方法）
- VI：書く（基本的な日本語表現とレポートの形式、レポートの三段構成、論証に必要なこと、引用・出典の示し方、ルーブリック評価表でのセルフチェック、文系理系いろいろなレポートの書き方テンプレート例）
- VII：発表する（プレゼンテーションの基礎、伝える力を高めるテクニック）
- VIII：ポートフォリオのすすめ（ポートフォリオの利用方法）
- IX：相談する（学習相談の窓口いろいろ、訪問やメールのマナー）

2-2. アカデミック・リテラシー入門の教材作成におけるルール

アカデミック・リテラシー入門は入学前教育用教材であり、受講対象は本学入学予定の高校3年生である。そのため教材作成者には、学術的、専門的内容・言葉遣いではなく、「わかりやすさ」を意識した一般向け内容・言葉使いを用いるよう求められた。作成時の具体的なルールや注意点として、「1つのサブテーマにつき、スライドはおおよそ10枚以内とする」、「イラストや写真などを積極的に使い、親しみやすく、見やすいものを作成する」、「文字や情報を詰め込みすぎず、視覚的にもシンプルでわかりやすいものを作成する」といった点が掲げられ、作成者全員の間で、質（レベル）と量の両面における共通認識が持たれた。

2-3. アカデミック・リテラシー入門の実施方法と状況

2022年4月より、本学全学教育学習支援ポータルサイトにて、次年度本学入学予定の全ての高校生向けに導入が開始されている。実施方法としては、アカデミック・リテラシー入門教材へのアクセス方法が掲載された文書を、本学合格者向け封書に同封・送付し、合格した人（推薦・総合型選抜、前期入試、後期入試、特別入試の順番）から順次課題に取り組んでいる。受講者は、本学の新生ポータルサイトより、アカデミック・リテラシー入門教材にアクセスし、受講後は指定のGoogle Formにて、教材内容に関連した12問の問題に解答する。案内文では、全ての問題に正解するまで繰り返し解答することが推奨されている。2022年度は、受講者770人中762人が提出し、提出率は98.9パーセントであったが、2023年度においては、724人中672人が提出し、提出率は92.8パーセントであったため、今後は提出率を改善するための方策がセンター教員間で検討されることとなっている。

3. アカデミック・リテラシー入門「発表する（プレゼンテーションの基礎、伝える力を高めるテクニック）」

上記で説明したように、アカデミック・リテラシー入門「発表する」は、本学入学前の高校生全員を対象とした入学前教育教材であり、「プレゼンテーションの基礎」と「伝える力を高めるテクニック」という2つのサブテーマについて説明する構成となっている。本項では、2つのサブテーマにおける14ページの教材内容が具体的にどのようなものかを示すべく、教材の各ページを図として紹介する形で、それぞれのポイントを解説する。

3-1. プレゼンテーションの基礎

図1では、まず初めにイントロダクションとして、「良いプレゼンテーションとは何か」という問いを問題提起として投げかけながら、大学という場では様々な場面でプレゼンテーションを求められること、教育の場のみならず就職の場でもそれが避けて通れない重要なものであること、そして「良いプレゼンテーション」にはいくつかの重要な構成要素があり、それらについて学ぶことが、この教材のひとつめのサブカテゴリ「プレゼンテーションの基礎」であることについて、簡単に触れている。

良いプレゼンテーションとは？

皆さんは「人前で発表すること」は好きですか？

「恥ずかしい」、「緊張する」、「経験がない」、「やり方がわからない」など、あまり得意ではない、できればやりたくないという方も多いでしょう。

しかし大学では講義内やゼミで、プレゼンテーションをする機会があります。また今後の人生において、就職活動での面接や職場でも、様々な形で発表を求められることがあるでしょう。

ここでは、「良いプレゼンテーションとは何か」という視点で、「プレゼンテーションの基礎」と「伝える力を高めるテクニック」に焦点を当て、プレゼンテーションについて説明します。



図 1

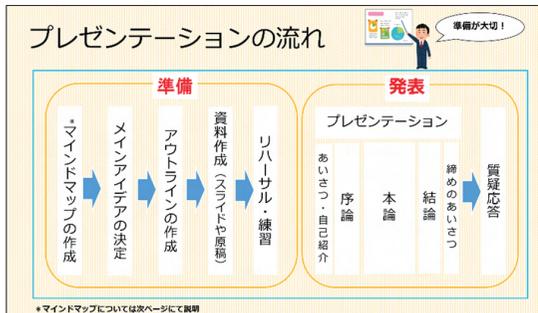


図 2

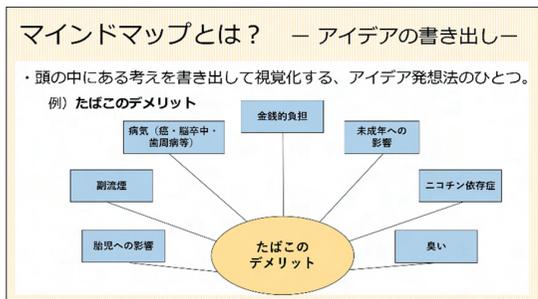


図 3

図2では、プレゼンテーションの流れの概略をフローチャート形式で紹介し、プレゼンテーションというものは、当日の発表そのもの以上に、入念な準備が大切であることを示している。プレゼンテーションには「準備」と「発表」という2つの段階があり、まず「準備」の段階では「マインドマップの作成」、「メインアイデアの決定」、「アウトラインの作成」、「資料作成（スライドや原稿）」を経た後に「リハーサル・練習」があること、そして「発表」では、プレゼンテーション自体にも流れの型があり、「あいさつ・自己紹介」の後に「序論」、「本論」、「結論」、「締めの挨拶」をし、最後に聴衆からの「質疑応答」という形がとられることを示している。図2で出てくる「マインドマップ」という用語は、「頭の中にある考えを書き出して視覚化する、アイデア発想法のひとつ」であるが、その概念は知られていない、または把握しにくい可能性がある。そのため、図3の「たばこのデメリット」で別途具体例を挙げながら、マインドマップとは何かについて説明している。

図4では、プレゼンテーションの目的について

プレゼンテーションの目的

プレゼンテーションは何のためにやるのでしょうか？

それは単に「スライドを見せる」、「書いた原稿を読み上げる」ことではありません。

その最大の目的は「聞き手を説得すること」です。

あなたの発表を聞いた相手を「なるほど」、「確かに」、「そうだな」と納得させることが、プレゼンテーションの醍醐味といえるでしょう。

そのためには次の「3つの要素」が重要で、プレゼンテーションの基礎となります。



図 4

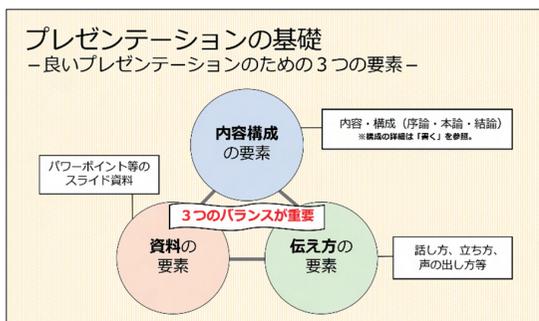


図 5

資料のポイント — スライド作成時の注意点 —

- ・スライドはできるだけ見やすく、シンプルに。
- ・項目は簡条書きで、情報を整理。
- ・文章ではなく、キーワードを軸に作成。（目安＝1行20字以内）
- ・絵、写真、図、グラフ等を入れて視覚的にわかりやすく。
- ・詳細は、口頭説明、追加資料、リンク等で対応。

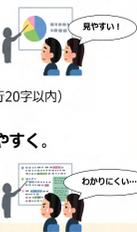


図 6

伝える力を高めるテクニック

—① 姿勢・立ち方—

《良い例》

- ・背筋を伸ばす
- ・正面を向く
- ・まっすぐ立つ
- ・手でジェスチャー

♪「説得する」には堂々と自信を持った姿勢が大切！

《悪い例》

- ・前かがみ
- ・原稿で顔を隠す
- ・腕を組む
- ・台に手や肘をつく
- ・ポケットに手を入れる

♪恥ずかしがった態度や偉そうな態度はNG!

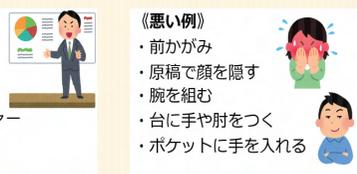


図 7

で説明している。多くの人にとって、プレゼンテーションの目的は「聴衆に作成したスライドを見せながら、書いた原稿を読み上げる」という理解になりがちであるが、本来の目的はそのような事務的で無機質なものではなく、「聞き手を説得する」ものであることを知る事が重要である。発表を聞いた相手を「なるほど」、「確かに」、「そうだな」と納得させることが、プレゼンテーションの目的の核となること、そのためには次のスライドで示す「3つの要素」が大切であることを端的に示している。

図5では、図4の最後で示した「(良いプレゼンテーションのための) 3つの要素」を具体的に示している。良いプレゼンテーションには「内容構成の要素」、「伝え方の要素」、「資料の要素」の3つがバランスよく取り込まれることが不可欠である。日本人のプレゼンテーションはしばしば「内容構成」と「資料」の要素は良いが、「伝え方」の要素が弱いといった評価をされることがあるが、「伝え方」の要素とは何か、どうすればより説得力のある良いプレゼンテーションとなるのか、テクニックの詳細は次項の「伝える力を高めるテクニック」に続く。

図6では、スライド作成時の注意点について触れている。スライド作成となると、つい文字や情報を詰め込みすぎてしまい、見る側にとって非常に見にくいことも少なくない。そのため、「見やすく、シンプルに」、「項目は簡条書きで」、「文章ではなく、キーワードを軸に」、「絵、写真、図、グラフ等を入れて視覚的にわかりやすく」、「詳細情報は追加資料やリンク等で対応」といったスライド作成における基本的ポイントを簡単に紹介している。

3-2. 伝える力を高めるテクニック

ここからは「伝える力を高めるテクニック」として、発表時に注意すべき6つのポイントを、「良い例」と「悪い例」をそれぞれ挙げながら、具体的に示している。

図7では、「姿勢・立ち方」のポイントとして、「背筋を伸ばす」、「正面を向く」、「まっす

伝える力を高めるテクニック
- ② 表情 -

《良い例》

- ・にこやかな表情
- ・リラックスした表情



♪ 自信のある堂々とした態度には余裕のある表情も大切。

《悪い例》

- ・へらへらと照れ笑い
- ・こわばった表情
- ・無表情



♪ 恥ずかしい気持ちや緊張による不安感が聞き手に伝わらないように注意。

図 8

ぐ立つ」, 「手でジェスチャー」を挙げ, プレゼンテーションの目的の核である, 聞き手を説得するためには, 悪い例のような恥ずかしがった態度や, 偉そうな態度を取るのではなく, 堂々と自信を持った姿勢をとることが大切である.

図 8 では, 発表時の「表情」として, 「にこやかな表情」や「リラックスした表情」をすることが大切であることを示している. 照れや緊張を隠すべく, 悪い例のように「へらへらと照れ笑い」をしたり, 反対に「こわばった表情」や「無表情」をみせることは, 学生の発表時にもよく見られる姿である. それでは自信の無さや不安感が聞き手に伝わってしまい, 発表自体が説得力に欠けた印象となる可能性があるため, 自信のある堂々とした態度を取ることで, またそれには余裕のある柔らかい表情を心掛ける必要がある.

伝える力を高めるテクニック
- ③ 声 -

《良い例》

- ・はっきり
- ・ゆっくり
- ・大きく
- ・抑揚をつける



♪ まずは口を大きく開けることから. 強調したい箇所はあえてゆっくり, はっきりとした滑舌で話す。

《悪い例》

- ・小さい声
- ・ボンボンと話す
- ・棒読み
- ・早口



♪ プレゼンにおいて「聞こえない」というのは致命的! お腹からの発声を心掛けよう!

図 9

図 9 では, 発表時の「声」に関するポイントを挙げている. 聞き手を説得するプレゼンテーションにおいて, 「聞こえない」, 「何を言っているのかわからない」というのは致命的なことであり, 最も避けなくてはならない. それにはまず, 口を大きく開けたお腹からの発声を意識し, はっきり, ゆっくり, 大きく, 抑揚をつけた滑舌の良い話し方を心掛けることが重要である. 始終同じ声量, トーンで話すと, 聞き手にとっても単調になってしまうため, 強調したい箇所はあえてゆっくり話すと, よりメリハリがつき, 聞き手が大事なポイントを理解することにも繋がる.

伝える力を高めるテクニック
- ④ アイコンタクト -

《良い例》

- ・まずは遠くから見つめる
- ・視線を会場全体にジグザグに



♪ アイコンタクトで熱意が伝わるとより高い説得力!

《悪い例》

- ・原稿を読んでいるだけ
- ・スライドばかり見る
- ・最初から最後までうつむく



♪ 目線の挨拶や自己紹介は原稿に頼らない! 原稿を読んでもいいが, 定期的に聞き手に視線を!

図 10

伝える力を高めるテクニック
- ⑤ ジェスチャー、手や体の動き -

《良い例》

- ・数字を指で示す
「1 つ目には…」
「2 枚の数字…」
「3 つのポイント…」 など
- ・変化や傾向を手で表現
「大きく伸びた」
「縮小した」 など



♪ 頑張る = 「拳を握る」、喜び、怒り、驚き = 「胸に手を当てる」など思いや考えを体で表現。

《悪い例》

- ・直立不動
- ・原稿を握りしめている
- ・座っている
- ・動かない



♪ 聞き手にとって退屈な時間にならないよう, 聞き手の関心を引き付ける「動き」を!

図 11

一度聴衆に視線を向けるだけでも, 発表者との間に繋がりが生まれ, 聞き手の意識・関心を繋ぎとめることが可能となる.

図 11 では, ジェスチャー・手や体の動きに関するポイントを示している. 始終全く動きのないプ

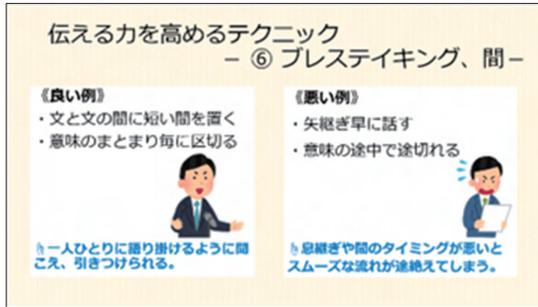


図12

プレゼンテーションは一本調子となり、視覚的に刺激の無い退屈な時間となる可能性があるため、例えば、「1つ目には…」といった数字を指で示す、「大きく…/小さく…」などの変化や傾向を手で表現する、また喜び、悲しみ、驚きといった感情は手を胸に当てることで表現する、といったジェスチャーを入れると、聞き手も発表に引きつけられ、プレゼンテーション自体の説得力にもよりプラスの効果をもたらさうる。

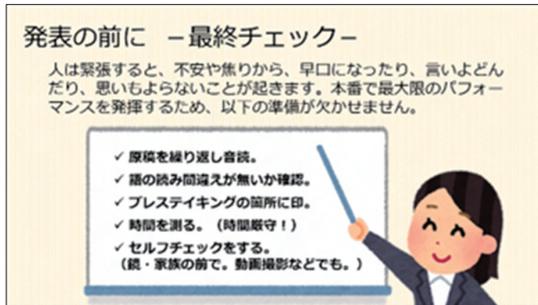


図13

図12では、最後のテクニックとして「プレステイキング、間」を紹介している。一般的に、人は緊張すると早口になりがちと言われている。悪い例のように、「矢継ぎ早に話す」、「意味の途中で途切れる」話し方をすると、プレゼンテーションのスムーズな流れが途絶え、せわしなくたどたどしい印象を与えてしまうことで、説得力の低下をもたらす。「文と文の間に短い間を置く」、「意味のまとまり毎に区切る」といった点に注意すると、聞き取りやすいだけでなく、聞き手に語り掛けているように聞こえ、両者の間に繋がりが生まれる。



図14

図13では、発表の前の最終チェックとして、5つのポイントを挙げています。人は緊張すると、不安や焦りから、早口になったり、言いどんだり、思いもよらない事態に見舞われることがあるため、事前の繰り返し練習は欠かせない。その具体的なポイントとして、「原稿を繰り返して音読」、「語の読み間違えが無いかな確認」、「プレステイキング（息継ぎ）の箇所印」、「時間を測る」、「（鏡・家族の前、自身による動画撮影で）セルフチェックをする」といった点を示し、

本番で最大限のパフォーマンスを発揮する重要性を示している。

教材の最後のページとなる図14では、「良いプレゼンテーションとは何か」という理解を深め、より具体的なイメージを把握するため、プレゼンテーションの参考例としていくつかのURLを紹介している。日本語の参考例としては、マイクロソフトのテレビコマーシャル、TEDより高橋晋平氏の「新しいアイデアの作り方」に関するプレゼンテーション、東京五輪招致のプレゼンテーションを挙げ、また英語の参考例としては、オバマアメリカ大統領の演説、Facebook CEOマーク・ザッカーバーグ氏の演説、トヨタ自動車CEO豊田章男氏の演説、イギリス人女優のエマ・ワトソン氏の演説を紹介している。

述べてきたように、本教材は、プレゼンテーションにおける「基礎的」な情報やテクニックの紹介を目的としている。しかし、もし学部教育においてアドバンス向けの「発展的」内容を教育したい場合は、必要に応じて各教員が適切な情報を適宜追加し、情報量を増やしたり、レベルの設定を

上げる、また不必要な情報も同様に、適宜省略・削除するなどし、より柔軟な形での活用が可能である。

4. 「アカデミック・リテラシー入門『発表する』」のプレゼンテーション教育への活用

4-1. 学部におけるプレゼンテーション教育の実態

前述したように、本学の全学教育推進センター教員が作成した「アカデミック・リテラシー入門」は、本来、本学入学を控えた高校生が、大学合格から入学までの時間を有効活用して「大学の学びとはどのようなものか」、「高校までの教育とどのような違いがあるのか」に関する基礎的知識を学び、入学後の初年次教育、教養・基礎教育に備えることを目的としたものである。しかしながら、本稿で活用方法を提案する「発表する」というカテゴリーに関していうと、良いプレゼンテーションの核となる基本的構成要素（「内容・構成の要素」、「資料の要素」、「伝え方の要素」）は、どのレベルの教育においても、共通した不変的なものであり、高校、大学、大学院といったレベル間でその内容やポイントが大きく変化するものではないため、本学における学部教育の中で活用することは不適切ではなく、むしろ教員にとっても学生にとっても、いくつかの点において活用のメリットがあると考えられる。

大学の学部教育において、科目をまたいだ情報共有、あるいは、異なる分野や教員間で横の繋がりを持つことは容易なことではなく、教員にとって、学生が他の講義で具体的にどのような知識・情報を得ているか不明なことも多い。したがって、教員が講義内で学生にプレゼンテーションを課したいと考えても、「プレゼンテーションの基礎知識やテクニックのポイントに関して、学生が現時点でどの程度の知識を有しているのかわからない」という状況に陥り、やむなくそれぞれの教員がそれぞれのタイミングや方法で、一から知識や方法を指導しなくてはならなくなる。そうなることで、教員側に多くの手間や負担が生じてしまい、効率の観点からも良いとはいえない。

一方で、プレゼンテーションを課された学生も、「発表の課題が出たが、どのように実施すればよいか方法・注意点がわからない」という不安に陥ることも少なくない。プレゼンテーション指導に関しても、科目や教員が変わると、説明・ポイント・キーワードが異なる場合も考えられ、そのことが学生の不安な気持ちや混乱を引き起こすことも否定できない。このような学生の不安を軽減するためにも、今後、同一教材を用いた一貫した教育内容が少しずつでも展開されるようになれば、科目横断的に学んだ知識が繰り返し登場することとなり、最終的には学生にとっても、知識の定着やスキルの習得といった学習効果が期待できるのではないかと考える。

このように、教員にとっての手間や負担、学生にとっての不安や混乱といった、現在のプレゼンテーション教育における非効率な状況を改善させるひとつの方策として、既に本学のホームページ上において、本学全ての教員・学生にその利用が可能となっている「アカデミック・リテラシー『発表する』」を活用することは、教員・学生お互いにとっての教育の効率化に繋がると考える。

4-2. ルーブリックを用いたプレゼンテーションの評価

講義内やゼミ内でプレゼンテーションを実施する際、発表者である学生にとっても、評価者である教員にとっても、具体的にどのような形で評価をするかは重要なポイントとなる。近年、ステーブンスとレビ（2014）が執筆した大学教員向けのルーブリック評価本が日本語で出版され注目されるなど、ルーブリックを用いた評価方法に対する関心は大学の教育現場においても年々高まっており、本項でも以下にその具体的方法を紹介する。

ルーブリックを用いたプレゼンテーションの評価方法は、発表者と評価者の両者にとってメリッ

トがあり、年々多くの教育現場でも導入の広がりをみせている。具体的なメリットとして挙げられるのは、例えば、ルーブリック表は発表者に事前に周知・配布がなされるため、発表者がプレゼンテーションにおいてどのような点に注意すべきかを前もって確認し、意識や対策ができる点、また評価者も、ルーブリック表に沿って始終一貫した評価ができるため、判断においてぶれが生じにくく、的確な評価や明確なフィードバックが可能となる点などが挙げられる。また、より高い信頼性をもった評価の実施を希望する場合、もし該当科目内で複数人の教員がいるのであれば、ひとつのプレゼンテーションの評価を複数人で実施し、平均点で判断する方法も可能である。

4-3. 効果的なルーブリックの構成要素

プレゼンテーション技術に関する学部教育にルーブリックを導入することは、前述したように、学生のプレゼンテーション能力自体の向上のみならず、教員の的確な評価や明確なフィードバックを促進させる意味でも極めて重要である。ルーブリックにおける効果的な構成要素を以下に示す。

1. 明瞭さと構成：アイデアの論理的な流れがあるか、各項目のタイトルが明瞭か、プレゼンテーションの構成に欠かせない序論と結論などが含まれているか否かなど、プレゼンテーションの「明瞭さ」と「構成」を評価する。
2. 内容と知識：情報が正確か、適切な事例が記載されているか、トピックに関する専門知識が提示されているかなど、プレゼンテーションの「内容」と「知識の深さ」を評価する。
3. 伝え方と関わり方：アイコンタクト、声のトーン、ボディランゲージ・ジェスチャー、聴衆の関心を引き付ける能力など、発表者が聴衆とどのように関わっているかを評価する。
4. 視覚的教材と資料：スライド、プレゼンテーション用の小道具、配布資料など、プレゼンテーションで使用された視覚資料の質と適切さを評価する。
5. 時間の管理：プレゼンテーションが短すぎたり長すぎたりしないよう、発表者のタイムマネジメントを評価する。
6. 総合的な評価：プレゼンテーションの効果やインパクトを総合的に評価する。

4-4. ルーブリックの作成・運用時における留意点

上記のようなルーブリックの構成要素を反映させた表を作成し、評価を実施するにあたり、下記で示す具体的なポイントに留意するとよい。プレゼンテーション評価用ルーブリックの一例は図15で示す。

1. 学習目標に合わせる：ルーブリックをコースの学習目標に合わせることから始める。学生に獲得が期待される具体的なスキルや知識が、基準に反映されていることを確認する。
2. 明確な基準を設定する：各構成要素の基準を明確かつ簡潔に定める。学生が理解しやすく、パフォーマンスを評価しやすくするために、各カテゴリーが期待する事項を明確な表現で述べ

る。

3. 評価配分を割り当てる：相対的な重要度に基づき、各構成要素に適切な評価配分を割り当てる。

4. パフォーマンスレベルを設定する：各基準について、通常「悪い」から「優れている」までのパフォーマンスレベルを設定する。学生が各レベルで期待されることを理解できるように明記する。

5. 具体例を示す：各基準の模範的なパフォーマンスがどのようなものかを説明する具体例を含める。こうすることで、学生はルーブリックをより身近に感じ、イメージを把握しやすくなる。

6. フィードバックを記載する：教員が建設的なフィードバックや改善案を提供できるフィードバックの仕組みを組み込む。各基準の横にコメントを記入するスペースを設ける方法などがある。

7. 相互評価を導入する：ルーブリックに相互評価の要素を組み込み、学生同士がプレゼンテーションを評価し合うことで、積極的な参加と相互学習を促す。

8. パイロットテストを行う：ルーブリックをコースに導入する前に、サンプルプレゼンテーションでパイロットテストを行い、ルーブリックで評価しようとしている内容が、効果的に測定できることを確認する。

学部教育のプレゼンテーション指導にルーブリック評価を取り入れることは、学生のコミュニケーションスキルを効果的に促進するための重要な一歩となる。うまく設計されたルーブリックは、発表者は何をすべきかに関する明確な指標を示すことで成長を促し、評価者の明確なフィードバックも可能にしてくれる。構成要素を慎重に検討し、ルーブリックを上手く活用することで、教員は学生のプレゼンテーションスキルの向上をサポートし、アカデミックなプレゼンテーション全体における質を高めることができる。

4-5. 「アカデミック・リテラシー入門『発表する』」のゼミにおける導入方法の一例

「アカデミック・リテラシー入門『発表する』」におけるプレゼンテーションの基礎知識やテクニックは、様々な講義やゼミに取り入れることが可能である。ここでは、卒業論文指導のゼミにおけるプレゼンテーション教育として、実施方法の一例を示す。

まず、学生には良いプレゼンテーションの手法と悪いプレゼンテーションの手法のサンプルを提供する。この段階では、学生自身が良い形式と悪い形式に「気づく」ことが有効であり、どのような形式が適切かを単にトップダウンで講義するよりも、「気づき」を促すという点において、効果的であると考えられる。効果的なプレゼンテーションの基礎を理解した後は、自分たちでコンテンツを作成するプロセスに入ることができる。まずは学生に、研究計画の要約を作らせることが出発点として有効だと思われる。次の段階は、要約を基にプレゼンテーションの流れを作成することである。この場合のプレゼンテーションの目的は研究計画を説明することであるため、この目的を第一

	もう少し (C)	良い (B)	大変良い (A)
声量	発表全体を通じ、教室全体に声が届かず、後部では内容がきちんと聞き取れない。	教室全体に声が届いているが、内容が十分に聞き取れないことがある。	教室全体に声が届いており、発表全体を通じ、内容がはっきりと聞き取れる。
アイコンタクト	発表全体を通して、聴衆を見ていないことが多い。始終下を向いていたたり、原稿で顔を隠していたりしている。	発表中に、聴衆を見ていないことが時々あるが、文と文のつなぎ目などで、聴衆に視線を向けている。	発表全体を通して、聴衆を見ている。会場全体にジグザグに視線を向けている。
ジェスチャー	発表全体を通じ、ジェスチャー、手や体の動きが全くない。直立不動である。	時折、ジェスチャーや手・体の動きを交える努力が見られた。	ジェスチャーを効果的に取り入れ、聞き手の関心を引き付ける「動き」がみられた。
資料	資料が配られていない。配られていても、資料が不適切である。内容が分かりにくい。誤字脱字が散見される。	資料は適切だが、文字情報が多く、若干読みにくい。図や表が少ない。	資料がわかりやすい上に、様々な工夫も見られ、発表内容の理解に役立つ。
内容・構成	わかりやすい順序で内容が構成されておらず、聞き手が理解することが困難。要点も不明瞭である。	聞き手が理解しにくい部分があるが、内容については順序立ててわかりやすく構成されている。要点はやや不明瞭である。	わかりやすい順序で内容がきちんと構成されており、聞き手が理解しやすい。要点も強調されている。
発表時間	発表時間は規定時間を過ぎた。あるいは大幅に早く終了した。	発表時間は、規定時間内であったが、やや早い時間で終了した。	発表時間は、規定時間内であり、直前まで時間を有効に使用していた。

図15 プレゼンテーション評価用ルーブリックの例

に考えてスライドを作成する必要がある。この時点で、1枚のスライドに過剰な量のテキストや視覚情報が詰め込まれている場合は、前述したスライド作成における一般的な問題点を指摘しておくとうい。学生がコンテンツを作成した後は、プレゼンテーションのテクニックに焦点を移す。ルーブリックを使用した相互評価と練習は、学生がルーブリックの実施要領を理解すると同時に、他の学生が利用しているテクニックの良し悪しに気づくという2つの効果がある。学生が他の学生をより率直

に採点できるよう、相互評価プロセスを匿名にすることが必要な場合も考えられる。相互評価及び練習は、学生が「アカデミック・リテラシー『発表する』」に概説されているプレゼンテーションのテクニックをすべて磨き上げるために、必要に応じて何度でも繰り返すことができる。教材内で示されている基本的な形式に従うことで、学生は優れたプレゼンテーションを認識できるようになり、さらに重要なこととして、どのような場であっても効果的にプレゼンテーションを行うためのスキルを身につけることができるようになる。

5. 最後に 一今後に向けて一

既に本学のホームページで公開され、誰もがアクセス可能である本教材「アカデミック・リテラシー入門『発表する』」を、本学の学部教育の現場でプレゼンテーション課題を実施したいと考える教員に気軽に利用してもらうことで、準備や指導における負担軽減の一助となることを願うのと同時に、学生にも、講義間で一貫した内容の教育を受けられる利点を生かしてもらい、「良いプレゼンテーション」の知識の定着やスキルの習得に繋げてほしい。

引用資料

アカデミック・リテラシー入門 (2023). 北海道医療大学全学教育学習支援ポータルサイト. <https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/celas/portal/>

ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ (佐藤浩章他訳). (2014). 大学教員のためのルーブリック評価入門. 玉川大学出版部.